

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年10月5日現在

機関番号：32660

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21500983

研究課題名（和文） 植民地期朝鮮における治療の社会史的研究

研究課題名（英文） Social History on Medical Treatment in Colonial Korea

研究代表者

慎 蒼健 (SHIN CHANG-GEON)

東京理科大学・工学部・准教授

研究者番号：50366431

研究成果の概要（和文）：朝鮮総督府は地方で朝鮮人医師が増えず、伝統医である医生も減少したため、漢薬種商の処方を書き置いた。また、日本語能力のない朝鮮人の間で巫俗の信仰医療が広く普及していた。東京帝大や京城帝大が行った社会衛生調査によれば、農村部では経済的に豊かな、僅かな層のみが日本語を理解し、その層は西洋医療の体験を有していたが、中層から下層の人々は西洋医療の体験がなかった。彼ら朝鮮農村の中・下層民は、西洋医学的には病気であっても、身体的症状を自覚的に主訴として語るができず、いわゆる「患者」になることができない存在であったと言えるだろう。

研究成果の概要（英文）：Governor-General of Korea left informal prescription drugs written by those who was preparing and selling traditional medicines and medical goods, because there're insufficient doctors and traditional doctors were gradually diminishing in the country. At the same time, Korean shamanism such as Muism was popular among the Korean people who didn't possess Japanese language skills. According to hygienic surveys of the Korean society by Tokyo Imperial University and Keijo Impereial University, only the rich can understand Japanese and accept western medicine in Korea's rural areas. But the middle and lower classes had no experience of western medicine. So they couldn't complain of the main physical ailment to western doctors. They couldn't become "patients".

交付決定額

（金額単位：

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：科学社会学・科学技術史、科学社会学・科学技術史

キーワード：医学史、科学史、朝鮮史、植民地

1. 研究開始当初の背景

(1) 植民地期朝鮮医学史研究において、本研究に関連した先行研究は日本に存在しない。ただし、筆者の課題意識と通底する日本

医学史研究としては、鈴木晃仁「治療の社会史的考察—滝野川健康調査（1938年）を中心に」（川越修・鈴木晃仁編『分別される生命』法政大学出版局、2008年に所収）を

げることができる。鈴木氏が提起する医学史の「水平的アプローチ」は本研究にとって示唆的であり、方法論として大いに学ぶべき先行研究といえる。しかし、日本医学史研究において魅力的な方法論も、そのまま植民地状況に援用できるものではないと考える。とりわけ受療するというリスクの中に経済的リスクを含めるだけでなく、あえて推測的な議論を許してもらうならば、被植民者が「植民者の医療を受療するリスク」とも呼ぶべき、植民地性を考慮する議論が必要である。

(2) 韓国での近代医学史研究は、この15年ほどの間に急速に進展し、いくつかの代表的通史が登場してきた。奇昌徳『韓国近代医学教育史』(1995)、申東源『韓国近代保健医療史』(1997)、李忠浩『日帝統治期韓国医師教育史研究』(1998)、パク・ユンジェ『韓国近代医学の起源』(2005)がそれに該当する。いわゆる民族主義的歴史叙述から脱却した好著が出てきているが、いずれも制度史、医療政策史、教育史に偏り、筆者が検討しようとする「下からの歴史」ではない。その意味で、韓国にも本研究と関連する先行研究は存在しない。

(3) さらに朝鮮近代医学史、とりわけ植民地医学史研究を見まわしたとき、(1)の鈴木論文で指摘されているように、「垂直的アプローチ」、すなわちある単一の病気にしぼって歴史を見る視角の研究が何点か存在する。滝尾英二氏のハンセン病、飯島渉氏のマラリア、申東源氏のコレラ、韓国結核協会編集の結核史など、いくつかの著作が発表されているが、いずれも朝鮮総督府や国家権力による上からの政策が中心的に研究され、植民地朝鮮社会が様々な病や傷害に対してどのような治療行為を選択したのかという問題には接近していない。

(4) 未だ著作としては結実していないが、筆者が行ってきた植民地期朝鮮医学史研究は、制度史と知の歴史を切り結び、どのような医学研究が植民地主義との関係の中で生産されていったのかを追究してきた。しかし、既存の制度史、政策史、教育史をあわせて、植民地期朝鮮医学史を眺めたとき、最も欠如している視点は、まさに治療の社会史とも呼ぶべき領域であると考えようになった。筆者は、先行研究やささやかな筆者自身の研究成果の反省から、本研究の課題を着想するに至った。

2. 研究の目的

本研究は、朝鮮半島における近現代医学史の鳥瞰図を描くための一課題である。朝鮮半島における医学史の鳥瞰図とは、医療政策の制度史、医学者の生産する学知だけから描けるものではない。いわゆるエリート(伝統エリートを含める)からの視点ではなく、医学

が医療技術を通じて受療される人々の視点から医学を考察する必要があることは言うまでもない。本研究において筆者が新たに設定した課題は、このような問題意識から生まれ、植民地期に生きた人々が多種多様な病気に対して具体的にどのような対応したのかという問題を考察し、植民地期医学史研究の新しい可能性を示すことにある。

これまでの科研費による研究とは異なる視点から植民地期を見るものであり、資料収集にも時間がかかり、海外の研究者との方法論的な議論にも時間を費やしたいと考え、3年間の期間を設定する。その中で、下記の(1)~(4)に関して考察・解明することを目指す。

(1) 植民地期朝鮮の疾病構造変化/各時代に重大視されていた疾病とは何か。

(2) 植民地期医療の多元性/どのような医・療術行為があったのか。

(3) 治療の宣伝・広告の実態/治療はどのように宣伝されていったのか。

(4) 人々の治療選択の実態とその分析/人々は病気や傷害に対して、どのような治療方法を選択し、その選択の背景にはどのような要因があるのだろうか。

3. 研究の方法

本研究は、その目的(1)~(4)を3年間で達成するため、次のような計画・方法を採用する。まず1年目は目的(1)と(2)の達成を目標とし、方法として資料収集、先行研究書及び論文の収集整理を行い、その限定的成果を研究会などで報告・発表する。2年目は8月までに目的(1)と(2)を完全に達成させると同時に、その成果を論文にまとめる。また、目的(3)と(4)の達成の基礎となる方法として、関連する資料収集、先行研究書及び論文の収集整理を行い、途中経過を国内学会だけでなく、国際学会にて発表する。最終年度となる3年目は、目的(3)と(4)の完全達成を8月末までとして、9月以降は3年間の研究成果をまとめて論文執筆を行い、冬までに国際的なジャーナルに投稿する。

なお、本研究には公式の研究分担者は存在しないが、これまでの研究経験から、韓国の研究者・大学院生と緊密な連絡、意見交換を行いながら研究を遂行する。

[海外の研究協力者]

1) 役割: 非定期的な研究会議参加者(知提供、意見交換)

①申東源氏(韓国科学技術院 KAIST 人文社会科学部助教授、朝鮮伝統医学史専攻)

②ヨ・インソク氏(韓国延世大学校医科大学医学講座助教授、朝鮮近代医学史専攻)

③林宗台氏(韓国ソウル大学校大学院科学史・科学哲学協同課程助教授、朝鮮科学思想史専攻)

2) 役割: 研究アシスタント(資料調査など)

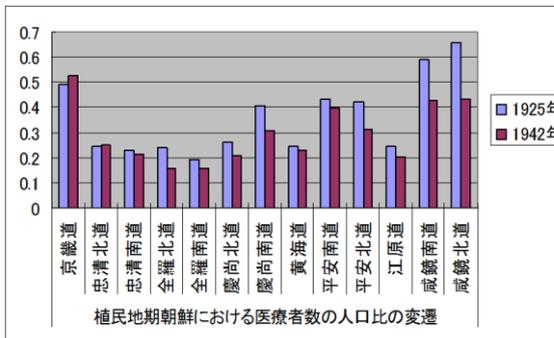
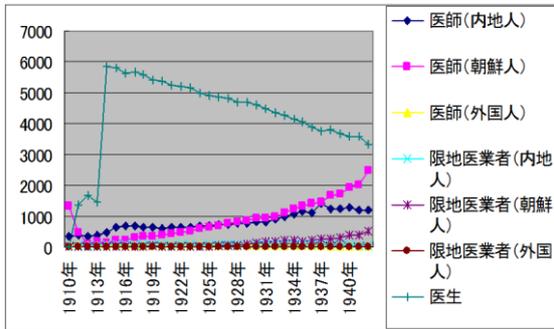
の補助、翻訳作業)

④宮川卓也氏(韓国ソウル大学校大学院科学史・科学哲学協同課程博士課程、植民地科学史専攻)

4. 研究成果

(1) 植民地期の疾病構造に関しては、既に先行研究が明らかにしているように、コレラやペストなどは抑制することに成功したが、水系伝染病である腸チフス、赤痢については抑制することができず、むしろ1930年代を通じて、都市部を中心として増加する傾向にあった。ただし、たとえば京城の腸チフス、赤痢のデータは信頼性に乏しい。この点は京城帝大医学部衛生学教室教授の水島治夫が当時から指摘しており、彼の京城の疫学研究では、京城在住の朝鮮人のデータを排除し、日本人のデータのみを用いて、京城の腸チフス、赤痢の疫学的考察が行われた。腸チフス、赤痢の朝鮮人罹患率に関しては、朝鮮総督府資料は批判に耐えうるものではないことがわかった。

(2) 正統医療に関しては、朝鮮総督府が医療機関として各地域別に、医病院、医師、医生、薬剤師、産婆、看護婦、種痘員、按摩、鍼灸術、薬種商などが認められている。各医療機関の量的な変化は把握できた。西洋医学を担う数は漸次増加する傾向にあったが、伝統医療を担う医生数は減少していった。



ただし、薬種商のうち、漢薬を扱う漢薬種商は朝鮮人が担い、こちらはむしろ微増傾向にあった。伝統医学に関しては、地域では漢薬

種商が担うという構造が浸透していった。総督府も医生の減少に対して、朝鮮人医師が地方で全く増えなかったため、朝鮮人薬種商が処方することを放置していた。一方、非正統医療としては、巫俗を挙げることができる。この数については精確な統計データは存在しないが、各種の社会調査から、その一部が明らかになった。とくに善生永助の生活状態調査によれば、京畿道水原郡や江原道江陵郡にて、日本語理解力のない朝鮮人の間で巫俗の信仰医療が普及していた実態が把握できる。なお、電気治療師に関しては新聞や雑誌の広告などからその存在を確認できるが、その活動の詳細については未だ全貌を解明できる史料の発見はできなかった。

(3) 都市部では、東亜日報、朝鮮日報をはじめとする民族系新聞や雑誌、また『満鮮之醫界』といった医学界雑誌において、薬の広告が見られる。とくに漢方薬がエキス化され、健康増進薬として「誇大」広告されている点は興味深い。しかし、そのような広告も都市部の限定された読者を対象としており、広く地方農村部を議論の射程に入れるならば、その宣伝広告の影響を見つけることは難しい。農村部においては衛生講習会開催や無料回診が行われており、活字メディアよりも、こちらの方が民衆世界へ接近していた。しかし

(4) でも示す通り、具体的な農村フィールドワークからは、民衆世界の医療文化が西洋化したことを示す証拠は見当たらない。

(4) 人々の治療選択の実態とその分析については、坂野徹・愼蒼健編『帝国の視角/死角』(青弓社、2010年)所収の論文「植民地期衛生学に包摂されない朝鮮人—1930年代朝鮮社会の「謎」から」にその成果をまとめた。朝鮮農村社会衛生調査会編『朝鮮の農村衛生』(岩波書店、1940年)によれば、農民は上層、中層、下層を問わず、西洋式産婆による出産介助を受けていない。

	上層	中層	下層A	下層B	全村
人手なし	5 (23.8)	22 (48.9)	19 (34.6)	15 (68.2)	61 (42.7)
素人介助	14 (66.6)	23 (51.1)	36 (65.4)	7 (31.8)	80 (56.0)
産婆(有資格者)	2 (9.6)	—	—	—	2 (1.3)
計	21 (100.0)	45 (100.0)	55 (100.0)	22 (100.0)	143 (100.0)

つまり、経済力のある層といえども、出産に関しては従来の地域・家庭に委ねられていた。また、日本語能力のない下層農民は、西洋医学の経験を持ち合わせていないことが判明した。その他にも、総督府作成の『生活状態調査』によれば、京畿道水原郡、江原道江陵

郡でも、日本語を解さない朝鮮民衆はほとんど西洋医学を選択していない。都市部に関しては検討の余地があるものの、農村部において調査者（＝西洋医学の医師）は西洋医学経験のない民衆と出会い、彼らの主訴を理解できなかったと言えるだろう。彼らは伝統医学にだけ身を委ねたわけではなく、病気の種類によっては漢薬種商から薬を購入、また巫俗に頼るケースもある。済州島の報告では、感染症に対して、自宅に札を貼っていたという事例も挙げられている。農村部では経済力がある過程でも西洋医学は選択されておらず、むしろ日本語能力のある家庭では西洋医学の経験が報告されている。経済力と日本語能力の関係など、慎重に議論すべきであるが、農村に朝鮮人医師がいない状況下においては、日本語能力と西洋医学選択の間に繋がりが見て取れる。これこそ、植民地期朝鮮における治療選択の植民地的性格と呼べるものではないだろうか。

(5) 『朝鮮の農村衛生』には「疾病票」なるものの作成が記述されているが、「疾病票」の原票の所在は不明である。この原票には、報告書で示された分析に収まりきれない記述が書き込まれているはずであり、この原票の発見から、農村社会の医療化問題へ接近していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 愼蒼健、コメント(シンポジウム: <昭和史>の中の人類学者—人類学と科学史の対話)、科学史研究、48巻252号、2009年12月、253頁
- ② 愼蒼健、中国語、京城帝國大學漢藥研究之成立、TAIWANESE JOURNAL FOR STUDIES OF SCIENCE, TECHNOLOGY & MEDICINE、招待論文、第11期2010年10月号、2010年、285—320頁

[学会発表] (計3件)

- ① 愼蒼健、シンポジウム「<昭和史>の中の人類学者—人類学と科学史の対話」へのコメント、日本科学史学会第56回年会、福岡・九州大学、2009年5月24日。
- ② 愼蒼健、植民地期朝鮮における衛生学の死角、日本科学史学会第57回年会・総会、東京・東京海洋大学、2010年5月29日。
- ③ 愼蒼健、「近代朝鮮における宣教医療と植民地医学—近代的身体の創出とその生命観」へのコメント、早稲田大学アジア

研究機構主催・第4回次世代フォーラム国際大会、東京・早稲田大学、2011年2月5日。

[図書] (計4件)

- ① 愼蒼健、他、皓星社、朝鮮近代科学技術史研究、2010年5月、総頁数460頁／該当351—387頁。
- ② 愼蒼健、編者、他、青弓社、帝国の視角／死角—(昭和期)日本の知とメディア、2010年12月、総282頁／該当9—52頁。
- ③ 愼蒼健、他、勁草書房、昭和前期の科学思想史、2011年10月、総頁数420頁／該当311—340頁。
- ④ 愼蒼健、他、丸善出版、科学・技術・倫理百科事典、2012年1月、総頁数2670頁／「儒教の観点」該当／1019～1023頁、「植民地主義とポスト植民地主義」該当／1075～1082頁。

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

愼 蒼健 (SHIN CHANG-GEON)
東京理科大学・工学部・准教授
研究者番号：50366431

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：